

楠本頼子は、柚木加菜子のことが本当に好きだった。

加菜子の、項のあたりの皮膚の粒子の細かきや、さらさらと靡く艶やかな髪や、伸びやかに善く動く指先が好きだった。

特に頼子が気に入っていたのは、大きくて黒い虹彩に囲まれた加菜子の瞳だった。

それは時として他人を射竦めるように鋭く、それでいて何時だって吸い込まれてしまいそうになる程深い色を湛えて、しつとりと濡れていた。加菜子はその瞳を閉じて、凝乎と音楽に聴き入っているような時、頼子はその桜色に上気したその頬に、そしてその臉に、そおつと唇を当てたくなる。

そんな衝動に幾度駆られたか知れない。

しかし、頼子は決して同性愛嗜好者などではなかった。

その感情は、彼女達が持つ性的衝動とはきつと少しばかり違っている。

頼子は加菜子以外の如何なる女性にもそんな劣情を抱いたことなどなかったし、また加菜子に対しても、実際にはそんなことなど出来はしなかったのだ。でも、加菜子の傍にいる時に感じるそれは静かな高揚感、どんな恋愛より切なくて、彼女の周囲に漂っている仄かな香りは、頼子の胸を何度でもときめかせた。

加菜子はいろんな意味で自然に惚って生きている。

頼子はそう思っている。

加菜子はクラスの誰より聡明で、誰より気高く、美しかった。他の誰とも馴れ合わず、ただ一人違う匂いを発していた。まるでけものの中に一人だけ人が混じったかのようだ。彼女に出来ぬことなどなかったし、だから苦しんだり悩んだりもしない。

加菜子は十四歳にして達観していた。

だから頼子は、そんな加菜子がクラスの中で自分だけと親しくしてくれることが不思議で堪らなかつた。他の生徒達の目に、それが果たしてどのように映っているものか、想像したこともなかつたけれど、彼女が皆の前で自分だけに親しげに声をかけてくれることが頼子の唯一の誇りだった。

頼子には父親がいなかったし、暮らし向きも決して裕福とは云えない。だから母親が無理をして入れてくれた学校だって、頼子にとってはぼんやりとした苦痛でしかなかった。

級友達は皆金持ちのお嬢様ばかりだったし、ただでさえ内向的で世間知らずの頼子にとっては、そこで交わされる会話は全て外国の言葉で、べちゃべちゃとしていてひとつも理解出来なかったのだ。

学校で学んで来るものは凡て劣等感で、頼子は毎日傷つくために予習をし、その日受けた傷を持ち帰って復習した。

加菜子が初めて話しかけて来た時、だから頼子は全く返事が出来なかった。

「楠本君、一緒に帰ろう」

加菜子は、誰に対してもそうして男の言葉で話した。

加菜子の前では、男女の区別は疎か教師と生徒の上下関係すら無意味だった。

種類の善く判らない草や花が茫茫と繁茂している土手を二人で歩いた。頼子は始終下を向きうらぶれた町工場の手前で別れるまで、遂に一言も口を利かなかった。

頼子はその夜、すっかり動揺してしまつて眠ることが出来なかった。

そして一晩中鏡で自分の貌を眺めた。

別に誰と違う訳でもない。いや、寧ろ家が貧しくなかったならば、ちゃんと父親がいたならば、頼子は容姿が優れている分、他の娘達よりも少しばかり勝っている。

実際、頼子は母が連れて来る酒臭い男達が揃つて好色な視線を向けて来るぐらいに整った顔立ちの少女なのであった。

水銀の膜一枚隔てて、鏡の中の自分と加菜子が重なる。

頼子の中で何かがもやもやと肥大した。

加菜子がいったいどう云う素性の娘なのか、頼子は知らなかった。加菜子もまた頼子に何も尋かなかつたから、頼子は自分のとても嫌な根つこのところを加菜子に見せることもなく、全く純粹に、咲いている花の部分だけで会話をすることが出来た。

でも——加菜子はきつと、頼子のことを凡て知っているのだ。だからこそ彼女の言葉は他の娘達の言葉のように上辺だけの空虚しい外国語にはならない。頼子には彼女の言葉がとても善く解かった。そして、自分の言葉も彼女にだけは、通じているように思えた。

加菜子は、頼子を善く夜の散歩に誘った。

工場の前で待ち合わせて、あてもなく夜の町を徘徊した。別にどこに行く訳でもない。繁華街を歩く訳でもないから補導されることもなかった。昼間歩いているのと同じ場所、見慣れた町並みが、加菜子の魔力で見知らぬ異都に変貌する。路地裏の暗闇が、電信柱の黒い影が頼子の胸を高鳴らせる。

「楠本君。せいぜい月の光を浴びるがいいよ」

加菜子は快活にそう云うと、くると身をひるがえ翻す。軀しなやかな首筋が月の光に蒼白く映えた。

「月光には何か不思議な魔力でもあると云うの？」

「わとをばなし伽嘶あしじゃあるまいし。月は太陽の光を反射しているだけさ。だからね、太陽の光は動物

や植物に命を与えてくれるけれども、月の光は一度死んだ光だから、生き物には何も与えちゃあくれないのさ」

「それじゃあ無意味じゃない」

「意味があればいいってもんじゃない。生きるってことは衰えて行くってことだろ。つまり死体に近づくとことさ。だから太陽の光を浴びた動物は、精一杯に幸せな顔をして、力一杯に死んで行く速度を早めているんだ。だから私達は、月に反射した、死んだ光を体中に浴びて、少しでもだけ生きるのを止めるのさ。月光の中でだけ、生き物は生命いのちの呪縛から逃れることが出来るんだ」

そうだ。加菜子は、だからやつぱり自然に倅こって生きているんだ。

頼子はそう理解した。

「猫のように生きるんだ。そのためには夜目が利かなくちゃいけない」

「夜目って——どうやって？」

「簡単なことさ。昼間寝ていればいい。私達猫には夜がある」

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。